

『教育技術』一九五七年五月（教育技術連盟／小学館）

■どうすれば学力は向上するか——学力とそれを支える条件について

教材教具と学力

ひとつひとつの具体的な問題をおさえよう

矢口 新



1

学力をささえる条件は何かといえ、生活のすべてのものが条件となつていると答えなければならぬ。そういえば、多くの人は、その中でとくに学力に影響するものがあるうと言ふかもしれない。それに対しては、それも時と場合によってさまざまであると答えるのが正しいのである。

人間のもっている学力などというものは、複雑なものであつて、そう簡単に、どの条件をよくしたら学力が向上するなどというものではない。たとえば先日発表された文部省の学力調査の結果では、規模の大きい学校の方が成績がよいといつてゐるが、これを簡単に学校規模を大きくすれば成績がよくなるな

どというように考えたならナンセンスである。

規模の大小などというのは、たんに物理的ではな、あるいはまた生徒の人口の多少というだけではない。もっと複雑な社会的条件を集約している。大きい学校は都会にあり、小さい学校は農村、山村、漁村、へき地にある。都会と農山漁村というのもまたそれは複雑な社会生活の表現であり、いくらでも細かい因子に分けることができる。それらの総合表現として大きいと小さいとの二つに分けられたというだけのことである。もしこの大きい学校というのを文字どおり単純に形式的に大きいと考へて、へき地に大きい学校をつくらうか。成績は今よりもつとさがるであろう。へき地に大きい学校をつくらう、子どもは学校へ通うのに、三時間も

四もかかつてしまう。笑い話になるではないか。

学力の条件を考へることは大切であるが、機械的に、何かの条件をよくしたら学力が向上するなど考へたらおかしいことである。無限にある、あらゆる条件をよくしなければ学力は向上しないのである。この場合の学力というのは、もちろん日本の子どもの学力という場合の社会的にみた学力である。ひとりひとりの子どもの学力ということになれば、その場合には、あるいはこれとこれというように指摘することができるかもしれない。それでもおそらくは無数の要因があつて、現実的には処理できないものにつづかるであろう。つまり学力は、社会のもつてゐる力の総合表現だと考へるのがもつとも正しいのである。しかしそういつてしまえばみもふたもないではないか。

けれどもわれわれのできるところから、その条件となるものを一歩でも改善していくことはできるではないか。一番できるところは何かといえ、教師の学習指導に関するところがらである。それをひとつひとつ少しでも改善していくこと、それを考へるといふ意味で学力とその条件を考へてみるということはいよいことであろう。

教材の提出教具ということについてもそういう点から考えることができる。ここで教材と教具の概念について一言しておこう。よく教科書は教材か教具かなどという質問を聞く。教科書はその中身に目をつければ教材であり、その形式に目をつければ教具である。もう一つ例をあげよう。映写機にフィルムをかけてスクリーンにある内容のことながら教材として提出する。その場合映写機は教具として使われている。映写機というものが教育の内容とされていないからである。しかし別な場合に映写機を教材として、その操作を学習させることもできる。その場合は教材として使われているのである。教材とは教育内容的な概念であり、教具とは形式からみた概念である。学力ととくに関連させて考える必要のあるのは、まず教材の問題というべきであろう。それと関連して教材の提出の方法を考えるときに、教具が問題になるといふべきである。こういう点も漠然としたり、混乱していたのでは、学力を向上させるといふことを考えるたしにならないであろう。

2

学力と教材の関係を考える場合に、ただ一般的に問題にしてもはじまらない。第一学力

という概念が漠然としている。国語の学力とか算数の学力とかというようにきわめて幅の広い概念である。ところが、具体的にそれをつかもうとすると、これはまたきわめてむつかしい。ある一つの字が書けるということも学力であるし、文章を読めるということも学力であるし、それを理解するというのも学力である。といって一つの字が書けるから、他の字が書けるとはかぎらない。三百の漢字を知っていても、三百一字目の漢字を知らないこともある。一つの文が読めても、他の文は読めないこともある。学力をつけるというのは、ひとつひとつ積みあげていくより道がないのである。漠然と学力を向上するなどと考えても手はない。だから何ができて、何ができないかということを具体的に調べることから学力向上の措置ははじまるというべきである。

よく読みの力をつける指導法などといった万能薬みたいなことが言われるが、そういうものが一般的にあると考えるのはあやまりである。それは指導法の一般的な原理があるというだけのことであって、具体的に、どういう学力をつけるかということになれば、いま生徒がそのことに関して何ができるか、どこまでできるか、などということ調べて、

それをつかんだ上で、正しい指導をするということである。つまり学力の調査をするということである。

学力の調査をするといえ、一般には、テストをやって、点数をつけることだと思っている。実際は点数などはどうでもよいことなのであって、どういう問題について、どれだけのできぐあいであったか、できなさかげんはどうであったかということ、ひとつひとつ具体的につかむことなのである。そうすれば、すくなくとも、その調査をした問題については、どこまででき、どこができないかわかる。あやまりにもいろいろなあやまりがあることがわかる。

そこまで押えてみれば、そこで、どう指導するか、それには、どんな教材を使用したらよいかかわかるはずである。それがわからなければ、それは教師としての適格を欠く人といふべきであろう。しかし一般にそういうように具体的に、生徒の学力の状態を把握しないで、学力を向上させるにどうしたらよいだろうなどと考えて、わからない、わからないといっている人が多いのである。それはわからないのがあたりまえであって、だれだってそんな漠然としたことはわからない。ひとつひとつ具体的に調べて、その調べたことにつ

いては、こういう教材を使って、こうしたらよいということがわかるのである。そういうことを積みあげていって、長い間に学力を向上させることができるのである。

3

このように言うときあまりにあたりまえすぎると人は言うかもしれない。まったくあたりまえすぎることではそれ以上に効果はないのである。効果があると思うのが大まかではないだろうか。よく視覚教材を利用したら学力は向上するだろうか、といった質問をする人がいる。それは適切に利用されればよいにきまつている。けれども、むやみやたらに使っても大して効果はない。だからただ使うとか、使わないとかいった表面的な問題でなく、どういうことを考えさせ、つかませるかというねらいに応じて、適切な教材が提出されれば、そこで効果があるのである。

つまり子どもの学力と、学習の目標と教材との関係ははっきりしていて、生徒は何がわからないから、そのために、何をやらせる、その教材はこれを使うというように、その間に正しい関連がついている時に生徒の力がつくのである。学力と教材の関係というのは、こういう関係にあるのである。

また学力テストをやって、どこの会社の教科書を使っている学校の成績がよいかなどということを調べたなどという話を聞く。つまり学力と教科書の種類との関係を見るというわけであろう。これみたいへんな見当がいをやっているわけである。くわしく言うときりがなが、教科書と学力とをすぐ結びつけて、直接に関係させて考えるということだが、はじめに言ったようにあまりに簡単な考え方である。教師の学習指導というものがその間にはいついていて、たとえ悪い教科書を使っても、成績をあげることができるのである。また使いものにならないほど、悪い教科書というものはあるはずもない。

こういう考え方でなくつぎのように考えるべきである。たまたまある問題を出して、生徒のできかげん、できなさかげんを調べたとする。それについての教材は、どの教科書では、どう提出され、どの教科書ではどう提出されていなかを調べる。それと生徒のできかげん、できなさかげんを関係させると、どの教科書では、どういう補助教材を使って、どう指導したらよいか、どの教科書ではどうしたらよいかということが明らかになるであろう。こうして学力を向上させるための教科書の使い方、あるいは補助教材の提出のし

かたなどというものもわかってくるのである。

要するに学力というものを、たんに一般的概念としてつかまえないで、具体的なひとつひとつのことができるかどうか、という問題として考える。それに合わせて、そういう具体的なこれのことができるようにするには、どういう教材が必要かと考えるのである。そういう具体的の問題として考えないかぎり、学力問題も、教材問題も、これ以上進展しないであろう。いたずらに理論をふりまわしても、現実に、学力をもった子どもができてこないのである。すべて環境が悪いから学力は向上しないなどと、威勢のよいことは言っても、それだけではいつまでたっても、現実の学力は向上しないということが起らないように、もつと地道に考えて実践する必要がある。教材と学力の問題を具体的に考えるということは、その意味でひじょうによいことである。

(国立教育研究所)